Re:FRain Online

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

　このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　Ｏｎｌｉｎｅ

【Ｎコード】
Ｎ６５７７Ｙ

【作者名】
本知そら

【あらすじ】
　同時接続者数国内最多を誇る純国産ＭＭＯＲＰＧ『ＦＲａｉｎ　Ｏｎｌｉｎｅ』。
サービスインしてから十年が経った今なおトップに君臨し続けるそのゲームを運営するＲｉｎｇｅｄ　Ｗｏｒｌｄ社が、数年振りの新作を発表する。
　その名は『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　Ｏｎｌｉｎｅ』。
　同社及び国内初のＶＲ対応ＭＭＯＲＰＧである。
　そのオープンベータテストに参加することになった主人公の遠近（とおちか）

圭は、とあることから通常のＰＣとは違う『ｎＮＰＣ』としてプレイすることになる。

妹の桔梗（ききょう）や、いとこの比与森千沙都（ひよもりちさと）と共に冒険を始めた圭は、高精細なグラフィックと五感を刺激する新感覚に感動しながら、ゲームにのめり込んでいく。

しかし、ある日突然、何の前触れもなくそれは彼らに襲いかかった。

※ＶＲＭＭＯＲＰＧ（ログアウト不能）物です。また、擬似的ではありますが主人公が♂⇒♀となっています。

プロローグ

……。

いつから私はここにいるのだろう。

数ヶ月前だったような気がするし、数時間前だったような気もする。

何も見えない、何も感じないこの真っ暗な場所は、私の時間の感覚を壊していく。

いや、時間の感覚だけではなく、五感そのものが壊れていく。

どこまでもどこまでも暗闇が続き、その中でただただ漂っているだけの私。

別に無気力だとか諦めたとか、そういうわけでは決してない。

むしろ私は今も、なんとかしてここから出ようと無様に足掻いている。

けれど、私の体は決して動かない。まるで私の体ではないかのように。

それでも諦めない。だから私は心で叫ぶ。

——誰かそこにいますか？

……。

――誰かそこにいますか？

……。

何も返ってはこない。そこに誰もいないのか、それとも……

――私の声は聞こえますか？

……。

――。

……。

やはり何も返ってこない。けれど私はその先を続ける。

――そこにいるかもしれないあなたへ。

――伝えて下さい。私は生きている、と。

――私はここにいる、と。

……。

――私は戻らないといけない。戻って、会わないといけない人がいるんです。

――だから、お願いします。

——私はここにいます。

……。

……。

暗闇と静寂が私を支配する。

やはり私の声は誰にも届かないのだろうか。

だとしても、

たとえ私の行動に意味がないとしても。

それでも私は、きっといつか、この声があなたに届くと信じて。

今日も私は、この暗闇から叫び続ける。

——そこにいないあなたへ。

——私はこれからもあなたを呼びます。呼び続けます。

——私の声が、いつか届く、その日まで。

——だから、

——いつかここへ来るあなたへ。

——私はここにいます。

第1話　ログイン　part1

「あぢぃ……」
燦々（さんさん）と光り輝く太陽が、じりじりと俺の体を焦がしていく。
　空を見上げれば、雲一つない青い空がどこまでも広がっている。学校の教室や体育館、トイレや廊下にまで空調設備が整った昨今の快適な環境にどっぷりと浸かってしまっている俺達世代には、連日続くこの猛暑は非常につらい。
　額に滲んだ汗が頬を伝い、真っ黒なアスファルトへポタリと落ちる。ジュッと短い悲鳴が聞こえて、瞬く間に蒸発してしまった。
　これ、肉焼けるんじゃないか？　と、熱にやられ気味の頭で思う。たぶん最近麺類ばかりが食卓に並ぶせいで、脳が肉を欲しているのだろう。
　今朝、家を出る前に見た天気予報を思い出す。
『七月二十四日。天気は晴れ。最高気温は三十八度。今日も猛暑日となるでしょう』
　視聴者の心のオアシスとなるお天気お姉さんのあの笑顔も、今は酷く憎たらしい。
「うわっ」
　持っていた棒付きアイスの最後の一口が、この夏の暑さでドロップアウトする。
　……俺だってこんな暑いなか頑張ってんだから、少しは根性見せろよ。
　平べったい木の棒を手に持ち、アスファルトに横たわる青い氷菓子を見つめる俺。端から見れば、とてもとても哀愁漂う光景だろう。
「なあ、桔梗（ききょう）。アイスくれ」
　悔しいので隣を歩くやたら小さい少女に新しいのをねだる。
「さっきのもう食べたの？」

棒付きアイスを一生懸命に舐めていた少女が小首を傾げて俺を見上げる。

少し目尻が上がり気の強そうな印象を受ける大きな目に、桜色の唇をした小さな口。肌は透き通るように白く、手足はほっそりとしている。そして申し訳程度に自己主張する胸に、俺より頭二つ分以上小さい小柄な体。

年相応にうっすらと化粧を施したあどけない少女は、紛う方なき俺、遠近圭の妹。今年高校生になったばかりの遠近桔梗だ。

「食べたというか、アイスの野郎に根性がなかったというか」

「……どういうこと？」

さらに首を傾げる桔梗。妹ながらなかなか可愛い。

「敵はこの夏の暑さ」

桔梗が振り返り、屍と化した青い氷菓子を目にする。

「溶けちゃったってことか。はい。これで最後だからね？」

桔梗がドライアイスの入ったビニール袋からアイスを取り出す。

「さんくす」

礼を言って受け取り、すぐに包装を引っ剥がして齧り付く。お馴染みのサイダー味が冷たさと共に口の中に広がる。

そういえばと、視線を桔梗に向ける。

大量の紫外線が降り注ぐ太陽の下、ノースリーブの白のブラウスと黒の膝上丈スカートという夏らしい出で立ちの桔梗は、その白い肌を大きく露出していた（主に肩から先）。

「日焼け大丈夫なのか？」

「ふぇ？　……あー」

一瞬桔梗がきょとんとするが、すぐに理解して、

「うん。ちゃんと日焼け止め塗ってあるから」

そう言い、「ありがと」と微笑んだ。

「そうか、それなら良かった」

その笑顔に心を癒やされながらも意地悪心が働いた俺は、つい口を滑らせてしまう。

「お前がそのなりでこんがり日焼けしたら小学生にしか見え――」
「あはは、お兄ちゃん。そんなにも晩ご飯に毎日酢の物が食べたいんだ」
「すみませんタコと酸っぱいのは勘弁してください」
若干こめかみの辺りに青筋が見える桔梗にすぐさま頭を下げ、誠意を持って謝罪する。
食卓の全権を桔梗に握られている手前、あまり桔梗を起こらせるのは得策ではない。酢酸とタコはこの世から消えれば良いのに。
自分の姿に多少のコンプレックスを持つ桔梗は、そのコンプレックスの要因である容姿と人柄の良さで学校でもなかなかの人気者で通っている。見た目は小さくて可愛くマスコットのよう。けれど成績はいつも上位をキープする頭の良さ。そして困っている人がいれば迷わず手を差し伸べる優しい性格に、趣味は料理と裁縫という家庭的な面も持ち合わせている。いやぁ～、クラスにこんな子がいたら真っ先に告白してますよ奥さん。
そんな人気者の桔梗は、高校生になってからよくラブレターを貰うらしい。
最初に貰ったのは桔梗が入学して僅か一週間後のことだった。当時「げ、下駄箱に手紙が入ってたっ！？」と酷く動揺した様子の桔梗に、気持ちよく夕寝（晩ご飯前の夕方に寝ること）していたところをたたき起こされたのを覚えている。
最近では週一くらいのペースでラブレターを貰うらしいのだが、それも桔梗の人気を考えれば致し方ない。むしろラブレターを貰ってなかったら「お前らの目は節穴かっ！」と教室まで怒鳴り込んでいるところだ。
ちなみに今のところは色恋沙汰に興味がないようで全て断っている。兄としては、もったいないようなほっとするような、複雑な気分だ。
……とまあ、妹の話はここまでにしよう。シスコンと疑われては困る。

しばらくアイスをガリガリと囓りながら歩道を歩いていると、大きな日傘を差した大学生くらいの女の人とすれ違った。
すっぽりと影に覆われた彼女を見て、『桔梗も日傘を差せば良いのに』と、ふと思う。
そのまま彼女を目で追い、首がきつくなってきたところで視線を戻す。
隣から強烈な視線を感じることに気付く。
「ん。どうした？」
何故か睨むように俺を見上げる桔梗がぽつりと呟く。
「やっぱりお兄ちゃんも大きい方が良いの……？」
大きい？　……ああ。そういえばさっきの女の人は胸が大きかった……ような気がする。たぶん。きっと。人自体よりも傘を見ていたから覚えていない。
自分の体にコンプレックスを持つのはみんな同じ。桔梗も、身長以外に女子ならその多くが持つという悩みを抱えていたのか。
よし、ここは兄として励ましてやろう。
「まあまあそう落ち込むな。男全てが大きい物好きというわけじゃないぞ？　なんせ俺は小さい方が好きだからな」
ちょっと自分の性癖をばらしているようで恥ずかしい。
「そ、そうなの？　でもさっきの人じっと見てたけど……」
「あれはお前も日傘差せばいいのになー、と見てただけだよ」
「お、お兄ちゃん……」
桔梗が胸の前で手を合わせて目を輝かせる。妹ながらなかなか愛らしい。
無垢な瞳（まなこ）で見つめられ、気恥ずかしくなってきた俺は、それを隠すようにちょっとぼけてみる。
「……が、すまない妹よ。俺はお前の兄。恋人とかフィアンセとか、そういう甘甘な関係にはなれないんだ。法律とか周りの目とか、主

に俺のアイデンティティ的に。だから他に俺と同じ趣向を持つ相手を見つけてくれ」

「――っ！　な、なな、こ、恋人って、お、お兄ちゃんなに言ってんのっ！？」

軽い冗談なのに、何故か桔梗は顔を真っ赤にしてドライアイスを投げてきた。

あるぇ〜？　俺の予想だと『何言ってるのお兄ちゃん。あははははっ』と笑い飛ばされるはずだったのに、どうしてこうなった。理解不能だ。

とりあえず固形物のドライアイスが鼻に当たったって涙出そうなんだがどうしよう。

第１話　ログイン　ｐａｒｔ２（前書き）

（※数字）が付いた語句は、後書きで簡単に説明しています。

第1話　ログイン　part2

目の前の自動ドアが開き、ひんやりとした空気が体に触れる。はあ、と体内の熱気をはき出すように大きく息を吐くと、幾分かさっきまでより体温が下がったような気がする。
「ふぅ。すずし〜」
桔梗がブラウスの胸元を摘んでパタパタと風を送る。
「やめとけ桔梗。ここは病院だぞ」
「え？」
桔梗の頭の上に疑問符が浮かんでいるように見えたが、そんなものは無視して真剣な表情で言い切る。
「お前のその不必要な行動で病院側が意図しない気流が生まれ、院内感染が拡大したらどうする？」
お手軽簡単バイオハザード。そんなことで感染したら今頃人類は滅亡している。
「う、うん。分かった」
人を疑うことを知らない桔梗は、ぎこちなく頷きブラウスから手を離す。
……ふう。これでよし。
心の中で安堵のため息をつく。
兄にチラリズムは止めてくれ。いろいろと毒だ。
「そういえばお兄ちゃん。同意書は持ってきた？」
「ああ。ちゃんと持ってきてるよ」
ポリエステル製のショルダーバッグから数枚の紙を取り出す。
「サインはした？　判子も押してきた？」
「お前は俺の母親か。そんなに心配なら見てみろよ」
同意書を渡すと、桔梗はすぐさま目を走らせる。
「うん。大丈夫そう」
同意書を俺に返す。一応大事な書類なので仕舞っておこうと鞄に

手を伸ばす。
「じゃ、いこっか」
しかしその手が鞄に到着することなく桔梗の手に掴まり、グイッと引っ張られる。
「ちょ、待てって」
「早く受付しないとそれだけお兄ちゃんの番が遅くなるんだよ？ほら、早く早く」
「分かった。分かったから離せって」
「いーやっ」
急かす桔梗に無理矢理引っ張られ、玄関正面にある端末の前まで来る。俺の代わりにその端末を操作し受付を済ませると、端末から番号の書かれた紙が出てくる。それを受け取り、画面で指示された場所へ向かう。
手を引かれ、前を行く桔梗の背中を見つめながら思案する。
病院についてから明らかに桔梗の歩く速度が上がっている。それほどまでに彼女は『アレ』が待ちきれないのだろうか。まあ俺も少なからず『アレ』には期待しているのだが。
目的の場所までたどり着き、番号の書かれた紙を受付の看護師さんに渡す。
ちょうど混んでいなかった時間のようで、すぐに名前を呼ばれた。
診察室へと入ってきた俺と桔梗を見て、「ああ、君たちか」と四十歳くらいと思われる医者が微笑んだ。
「同意書は持ってきたかね？」
「はい」
両親と俺のサインが入った同意書を医者に渡す。
「……大丈夫のようだね。ではすぐに治療を始めるけど、ご両親は来ていないのかね？」
「俺と妹は元々田舎の方の出身で、こっちの学校に通うために今は親戚の家から通わせて貰っているんです。ここから実家までは結構距離があるし、両親は仕事が忙しいようなので、遠慮して貰いまし

た」
「そうか。分かった。まあこの治療は他の治療法よりもリスクが極端に低い。同意書なんて大仰な物を書かせてしまったけど、心配なんてまったくする必要はないから安心してくれ」
同意書には『数万分の一の確率で後遺症が残る可能性があります』等のこれから受ける治療の危険性を訴えていた。とは言えそれは、歩いていて交通事故に遭うくらいの確率だったので、まあよほど運が悪くない限りは大丈夫だろうというものだった。それでも医療という物は常に死と背中合わせの業種。万が一のことを考え、同意書という物が必要なのだろう。
医者がカルテに何かを書き込み、それを看護師に渡す。
「では遠近さん、こちらへ」
看護師さんに付き従って診療室を出た。

数日前のことだ。
『タダで健康診断受けられるから行ってきなさい』と母さんから電話を受け、渋々俺と桔梗は、この地域じゃ結構有名な病院へとやってきた。
せっかくの夏休みを初日から潰されるなんて、と桔梗と愚痴りつつ一日かけて体の隅々まで検査を行った結果、なんと俺のレントゲンにだけ小さな黒い影が映っていたのだ。
翌日。そのことを伝えると両親は会社を休んでまで遠路はるばる病院へとやってきた。両親を交えて医者と話をしたところ、この黒い影は俺の年齢からして、まったく気にしなくても良いものらしいが、完全に陰性というわけでもなく、心配であれば治療を受けてみてはどうかということだった。もし治療するならと勧めてきたのは、カプセル治療という聞いたことのないものだった。
カプセル治療とは、カプセルの中を人の体を健康体へと修復する特殊な液体で満たし、その中に数日から数ヶ月浸かり続けることで

病気を治療するという最新の治療法だった。通常の施術よりも時間はかかるが、体に負担をかけず傷も残らないという。ちょうど夏休みに入ったばかりだったこともあり、心配性な両親は二つ返事で俺にその治療を受けさせることを決めた。

そんなわけで、俺は今日からその治療を受けるために、付き添うという桔梗を連れて病院へとやってきたのだ。

だが、桔梗にはそれとは別のもう一つの目的があってここにきていた。

それは……

「はい、桔梗ちゃん。頼まれていたものよ」

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそうに看護師さんから受け取ったのは、最新型のヘッドマウントディスプレイ（※1）と一枚のメモ用紙だった。

俺は大きくため息をついて、ヘッドマウントディスプレイを抱きしめる桔梗に視線を向ける。

桔梗が抱きしめるヘッドマウントディスプレイは従来のただ映像を見るためのものとは少し形状が違い、より薄型で、より頭に密着するような構造になっているようだった。また電極パッドのようなものがいくつかあり、コードでヘッドマウントディスプレイと繋がっている。

あれがVR（※2）対応のヘッドマウントディスプレイか。実物を見るのは初めてだ。あの電極を頭部や首筋に張ることで、その電極が脳波を受け取り、また電波信号を送ることで、ヘッドマウントディスプレイ自体から得られる情報と合わせ、仮想空間を五感で体験可能とするものらしい。

先月から日本でも市販されるようになったばかりの最新機器であり、かなり高額なため一家に一台とはいかない代物だ。それをこの看護師さんがひょいと貸してくれたのには理由がある。

それは看護師さんから受け取ったもう一方のメモ用紙に書かれている英数字にある。
そこに書かれているのは『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』のオープンベータ参加用シリアスナンバーだ。
『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』とは、Ｒｉｎｇｅｄ　Ｗｏｒｌｄ社が現在もサービスを続けている『ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』の新作であり、同社が初めてＶＲ技術を使用した、五感全てで体感できる新感覚ＭＭＯＲＰＧ（※３）だ。
『ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』はサービンインしてから十年たった今でも国内で最も同時接続数の多い純国産ＭＭＯＲＰＧであり、その高い知名度から、一年前に新作発表会で『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』が紹介された際には、国内初のＶＲ対応ＭＭＯＲＰＧということもあって、それはもう凄い反響を呼んだ。
それから約一年が経過した明日。幾度かのクローズドベータを経て、ついにその新作がオープンベータ（※４）を開始するのだ。
この前病院へ来た際に、俺と桔梗は順番待ちの空き時間に、そのオープンベータについて盛り上がっていた。
純国産としては初のＶＲ対応ＭＭＯＲＰＧであり、またクローズドベータの評判も上々と言うこともあって、俺も桔梗も『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』には並々ならぬ思いを寄せていた。ただ、『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』をプレイするにはＶＲ対応のヘッドマウントディスプレイが必須だった。一般庶民な俺達にそんな高価な代物があるはずもなく、そのせいでクローズドベータもオープンベータも泣く泣く応募を取りやめたのだ。
それでもやっぱりプレイしてみたかった俺達は、近くのネットカフェに通い詰めてでもプレイしようかと話していたところ、ちょうど通りかかったこの看護師さんが、知り合いにＲｉｎｇｅｄ　Ｗｏｒｌｄ社に勤めている人がいること、そしてその人からＶＲ対応ヘッドマウントディスプレイを貸し出すので、『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ　ｏｎｌｉｎｅ』をプレイして感想を聞かせてくれる人を探してほし

い、と頼まれていることを俺達に話した。
それに食い付いたのは俺よりも桔梗だった。
『目に入れても痛くないどころか快感です』の妹だが、唯一困ったところがあった。それがこのネトゲ（※５）だった。
元々は、いつも俺にべったりだった桔梗が、『ＦＲａｉｎ ｏｎｌｉｎｅ』をプレイする俺を見て興味を持ち、やり始めたのが最初だった。一度はまると飽きることなく長く続ける質（たち）の桔梗は、すっかりネトゲにはまってしまい、以来暇さえあればパソコンに齧り付き、深夜までネトゲをプレイするようになった。俺よりも接続時間が長くなり、俺よりものめり込んでしまった桔梗をさすがに心配になってきた俺は、何度か桔梗をネトゲから離そうと思ったのだが、成績は下がらないわ友達との付き合いはちゃんと続けているわ親には隠し通すわで、注意するべきところが見当たらず、結局ずるずると今日まできてしまった。
目的の物を受け取った桔梗は、看護師さんに何度もお礼を言った後（のち）に、
「それじゃ、私は帰ってさっそくキャラエディットして明日を待ってるから、お兄ちゃんも明日ちゃんと遅れずに来てね！」
そう言い残して帰って行ってしまった。
……俺がカプセル治療を始めるところを見送りもせず帰るとは……。
ちょっと寂しくなった。案外俺って妹にとってはどうでもいい存在？
ちなみに桔梗が言っていたように、俺も明日からのオープンベータには参加することになっている。
このカプセル治療に要する時間は約三十日。夏休みのほとんどを使うことになるらしい。その間ずっと俺はカプセルの中で、ただプカプカと浮いているだけらしく、さすがにそれは暇すぎると言うことで、なんと治療中に『Ｒｅ：ＦＲａｉｎ ｏｎｌｉｎｅ』をプレイ出来るようにしてもらった。実は俺の担当医もあの看護師さんの

知り合いと友人らしく、せっかくだから兄妹一緒にと、桔梗の分とは別に俺用のVR対応機器を用意してくれた。さすがにカプセル内にヘッドマウントディスプレイを持ち込むのは無理なため、特性の電極を使用して五感全てを直接脳に送り込む特別仕様にして、治療中でも他のプレイヤーと変わらずプレイできるようにしてくれた。
しかも俺は特別な役回りを、そして特別なキャラを使わせてくれるという。
俺は少しうきうきしながら、看護師さんの後について、廊下の角にある部屋へと入っていった。

第1話　ログイン　ｐａｒｔ2（後書き）

※1　ヘッドマウントディスプレイ：略称はＨＭＤ。頭部に装着する表示装置。一般的に市販されている物は大画面を体感できるディスプレイとして使用されている。
※2　ＶＲ：バーチャルリアリティ。仮想現実。人工的に作り出した映像や音響から、現実感を作り出す技術。
※3　ＭＭＯＲＰＧ：Ｍａｓｓｉｖｅｌｙ　Ｍｕｌｔｉｐｌａｙｅｒ　Ｏｎｌｉｎｅ　Ｒｏｌｅ－Ｐｌａｙｉｎｇ　Ｇａｍｅの略。多人数同時参加型オンラインＲＰＧ。国内産の代表作としてはＦｉｎａｌ　Ｆａｎｔａｓｙ　ＸＩなどが挙げられる。
※4　オープンベータ：オープンβとも書く。正式サービス前の負荷テスト等を兼ねて行う、無料でプレイができる期間のこと。ごく一部の人しかプレイできないクローズドβとは違い、基本アカウント登録ができれば誰でもプレイ可能。ゲームによってはオープンβからそのまま正式サービスへ移行するものもある。この期間に不具合やバグ、サーバーの初期化等があっても正式サービス期間ではないため基本プレイヤーは文句は言えない。
※5　ネトゲ：ネットゲームのこと。インターネットを介して遠くの人とゲームができる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6577y/

Re:FRain Online

2011年11月20日00時46分発行